

修士論文(要旨)

2016年1月

保育士の陰性感情に対する対処行動の過程についての質的研究

指導 山口 一 教授

心理学研究科
臨床心理学専攻
214J4005
保坂芳子

Master's Thesis (Abstract)
January 2016

A Qualitative Study of the Process of Coping Behaviors for Negative Feelings of
Nursery Teachers

Yoshiko Hosaka
214J4005
Master's Program in Clinical Psychology
Graduate School of Psychology
J.F.Oberlin University
Thesis Supervisor: Hajime Yamaguchi

目次

I 問題提起.....	1
II 目的	1
III 方法	1
IV 結果	1
V 考察	2

引用文献

要旨

I 問題提起

全国保育士会の倫理綱領(柏女霊峰監修 2009)には、保育士に求められるものとして、自らの人間性と専門性の向上の2要因をあげている。人間性について、島田(2009)は「簡単に身に付くことではない。これは保育者の過去の生活経験が反映される。保育の場面でも、子どもが保育士の思いと異なった行為を見せても許容するといった忍耐を重ねることにより保育者自身の人間性を高めることにつながる。そのことによって子どもとの関係がより深いところにつながっていく」と述べている。専門性については、岸井(2000)は、「子どもの発達理解、カウンセリングマインド、発達に即した指導計画を立て環境を通して実践いく」と述べている。

神谷ら(2011)は、「保育者の感情労働と職業的キャリア」に関する研究では、「保育士の専門性として求められていた明るさ、優しさ、愛情は保育士にとっては自らの情動制御に関わる問題」と述べ、感情労働という視点から感情コントロールの重要性をあげている。また、斎藤ら(2009)は、「経験を積み重ね知識や技術を身に付けることが保育士としての自信や効力感が高まり、そのことがメンタルヘルスに寄与する」とし自己効力感とメンタルヘルスの関係を述べている。これらのことを踏まえて、本研究は、保育士のストレスと感情コントロールはどのような過程を経ているのかを明らかにし、保育士の陰性感情に対する対処行動について研究するものである。

II 目的

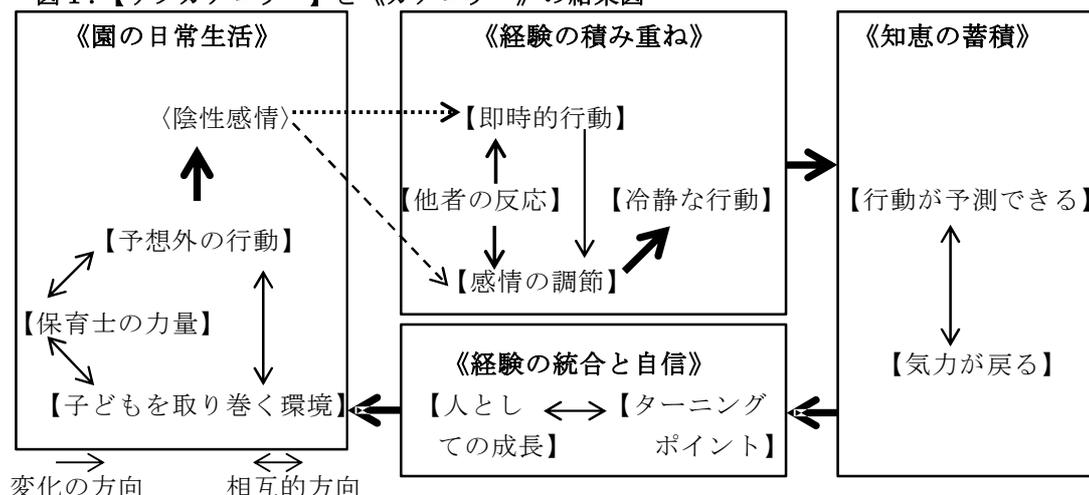
本研究では、保育士の仕事に慣れ自分を振り返ることができると考えられる経験10年以上の保育士にインタビューし、保育士の陰性感情に対する対処行動の変化の過程を明らかにすることにより、陰性感情の効果的な解決、およびその結果としてのストレスの低減に関する研究を進展させることを目的とする。

III 方法

調査対象者は、国内在住の10年以上の経験ある女性保育士(正職員また正職員経験者)である。機縁法により研究者の知人の保育士と知人の紹介による保育士を抽出した。抽出した保育士に対して、半構造化面接により1人あたり対して約1時間程度の面接を1回実施した。許可を得て録音後、逐語記録を作成しM-GTAによる分析を行った。

IV 結果

図1. 【サブカテゴリー】と《カテゴリー》の結果図



抽出された 43 の概念から 11 の【サブカテゴリー】と《園の日常生活》《経験の積み重ね》《知恵の蓄積》《経験の統合と自信》の 4 のカテゴリーが生み出された。それは、上記の結果図として表わされた。これにより陰性感情に対する対処行動は保育士の成長のプロセスとして表されることが明らかになった。

V 考察

結果図から、保育士は、日常の様々な場面で陰性感情が喚起され、経験の浅いときは感情的になり即時的対処行動を取っていた。経験を積み重ねにつれて自分を落ち着かせ感情の調整ができるようになり、感情の調整が進むにつれ冷静な指導的な行動が可能となった。このような経験の積み重ねにより、知恵が蓄積され、自己肯定感や仕事に対する喜びや感動を得られるようになっていた。さらにそれは、保育士としての経験の統合と自信が生み出されることに繋がり人として成長していった。それが日々、子どもとの関わりに戻され活かされるという循環として捉えることができた。つまり、保育士としての経験の統合と自信は、再び子どもに還元されることを繰り返しながら、螺旋状になり更なる進化へと向かっていると考えられた。津守（2007）は、「予想もしなかった新学期の混乱に直面して、あらためて子どもの側に立つ覚悟を決める。また同僚や親たちと共に子どもを育てる生活をつくることに保育の新たな意味を見出す。いずれも、変化に直面して、新たな状況にある自分を受け入れ、より広い視野に立って、新たな自分を形成する行為である」と述べている。このようにこの結果図からは、日々の変化を受け入れながら保育士も変化して成長するというプロセスが浮かびあがった。

今後、保育士の有り方を模索している若い人が、本研究で示された結果をモデルとして、子どもと共に成長する保育士としての展望を持つ契機となればと願っている。また、経験者は、今もなお保育士として変化成長している過程にあるものとして、次代を担う若い保育士をサポートしつつ、共に成長し合う関係を構築していくために本研究を活用してもらうことを期待するものである。

引用文献

- 柏女霊峰監修 全国保育士会編(2009). 全国保育士会倫理綱領ガイドブック.
- 神谷哲司・戸田有一・中坪史典・諏訪きぬ (2011). 保育者における感情労働と職業的キャリア 東北大学大学院教育学研究年報 59, 2, 95 - 108.
- 岸井慶子(2000). 保育の現場から保育の専門性を考える 発達 83, 16-21 ミネルヴァ書房.
- 斎藤恵美・田中紀衣・村松公美子・橘玲子・宮岡等(2009). 保育従事者のバーンアウトとストレス・コーピングについて 新潟青陵大学大学院心理学研究 3, 23 - 29
- 島田ミチコ(2009). これからの保育士に期待される専門性について 関西学院大学リポート 教育学論究, 1, 41 - 47.
- 津守 真(2007). 保育者の地平 ミネルヴァ書房.